

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 ( 学 術 )	氏名	SYAHRUR MARTA DWISUSILO
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
論 文 題 目			
ジャワ時代の武田麟太郎			
論文審査担当者			
主 査	教 授	西 原	大 輔
審査委員	教 授	中 村	春 作
審査委員	教 授	柳 澤	浩 哉
審査委員	教 授	有 元	伸 子 (文学研究科)
〔論文審査の要旨〕			
<p>本研究は、南方徴用作家としてジャワ島に滞在した小説家武田麟太郎（1904～1946）を分析対象としたものである。プロレタリア作家武田麟太郎は、1941年に陸軍に徴用され、1942年3月1日から1943年11月8日までジャワ島で暮らした。インドネシアの文化と人々に深い愛着を抱いたこの文学者は、日本人読者に向けてジャワ島に関する随筆を発表する一方、現地人に対する宣伝宣撫活動を行った。また、日本軍がジャカルタに設立した啓民文化指導所では、インドネシアの文学を積極的に育成するとともに、サヌシ・パネ（兄）、アルミン・パネ（弟）という知識人兄弟と積極的に交流した。</p> <p>第一章「ジャワ・バリ全島巡回の旅」では、1942年4月15日から6月8日まで行われたジャワ・バリ旅行の全貌が、実証的に明らかにされている。陸軍報道班員武田麟太郎は、「ジャワ・バリ巡廻」の命令を受け、一行30人で両島をめぐる。作家は、イスラム教や一夫多妻制などの現地文化に好意的であり、偏見を排して理解に努めている。また、ソロやジョクジャカルタの王と出会い、ジャワをお伽噺のような世界として描いた。ジャワ更紗や仏教遺跡などの文化的豊かさに注目する一方、プロレタリア文学者らしく、庶民の経済的な貧しさにも目を配っている。</p> <p>第二章「南進」著作の受容」では、武田麟太郎の随筆集『ジャワ更紗』（1944年）における、「南進」著作批判について論じられている。明治以降、日本人の南方進出を主張する南進論が盛んになり、多くの書物が刊行された。武田は、これら帝国主義的な「南進」著作に批判的だった。南進論の多くが、現地人を怠け者の遅れた「土人」とみなしたのに対し、武田麟太郎は、オランダ人に支配されていたジャワ人に同情的であり、異文化を肯定的に理解しようとする姿勢があった。その一方、南方徴用でジャワを訪れたこの作家の背後に「大東亜共栄圏」の影があることも、同時に指摘されている。</p> <p>第三章「同一性」言説について」では、武田麟太郎の作品が、エドワード・W・サイードのオリエンタリズム論を補助線にして読み解かれてゆく。南進論の帝国主義的言説においては、インドネシア人が「土人」として描かれた。これに対し、大東亜共栄圏の言説では、「同じアジア人」という同一性の主張が行われた。第二次世界大戦中、武田麟太郎はジ</p>			

ジャワを描くにあたり、なつかしさを喚起する言葉を用い、日本とジャワの共通性を強調している。これは作家の実感そのものだったが、大東亜共栄圏の政治的言説として機能した一面があった。自己／他者というオリエンタリズム論の図式の中で生じたもう一つの問題は、華僑の存在である。華僑はジャワを経済的に支配していた。貧しいジャワ人から利子を取り立てる華僑を、左翼作家武田麟太郎は否定的に描く。実はこの言説は、南方資源の確保という経済的目的を追求していた日本に対する、武田麟太郎の批判でもあった。結局、大東亜共栄圏の現実に懐疑的なこの作家は、インドネシア独立の熱心な支援者となったのである。

第四章「武田麟太郎と啓民文化指導所」では、日本が戦時下のジャカルタに設立した啓民文化指導所での武田麟太郎の宣伝活動、およびインドネシア人文学者との関係が論じられている。現地人の識字率が低かったため、日本軍宣伝班は演劇を重視した。その結果、日本人作家は、インドネシアの文化人と共同で活動することになった。サヌシ・パネ、アルミン・パネ、カマジャヤ、R・アリフィンらがかかわった。

1943年4月に正式発足した啓民文化指導所は、文学・美術・工芸・演劇・映画の五部で構成されていた。武田麟太郎は文学部の「指導」に就任、文学部長アルミン・パネと親密な関係を築いた。啓民文化指導所文学部では、出版事業、戦時文芸作品賞、青年文学会などの活動が行われた。青年文学会は、数多くの若手インドネシア人文学者を育成した。ストモ・ジャウハル・アリフィン、アオ・カルタハディマジャ、ウスマル・イスマイル、ロシハン・アンワル、カリム・ハリムら青年作家について、詳しく論じられている。

第五章「武田麟太郎とパネ兄弟」では、サヌシ・パネ（兄）、アルミン・パネ（弟）との関係が扱われている。武田麟太郎は、内地帰還後に出版した『ジャワ更紗』に、アルミン・パネ宛の「手紙」を収録した。二人は「肝胆相照らす仲になり」、インドネシア独立という夢を共有した。マルクス主義の影響を受けたアルミン・パネは、反オランダ独立運動に強く惹かれていた。また、オランダ式エリート教育を受けながら、クロンチョンという庶民の音楽を愛した。これらの点が、プロレタリア文学者武田麟太郎と響き合ったのである。一方、岡倉天心に通じる東洋主義者サヌシ・パネとも、武田麟太郎は深い関係を築いたのだった。

以上のような内容を持つ本論文は、次の三点において高く評価できる。第一に、従来研究が手薄だった、ジャワ時代の武田麟太郎の行動及び作品を詳細に検証したこと。第二に、武田麟太郎の第二次世界大戦期の言説を、南進論およびオリエンタリズム論の視点から分析したこと。第三に、南方徴用作家武田麟太郎とインドネシア人文学者との交流の諸相を明らかにしたこと。特に第三点は、日本語・インドネシア語双方に通じたシャルル・マルタ・ドゥイスシロ氏の研究能力が遺憾なく発揮されたものである。本論文は、近代日本文学研究に資すると同時に、インドネシア文学研究においても斬新な知見をもたらす、比較文学の優れた研究成果である。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（学術）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成28年10月26日